

岩登り用具

— 技術も含めて —

金坂 一郎

靴に慣れておいた方が便利だともいえる。

岩登りの道具を選ぶにあたっては、まずこういったことを頭に入れておかないと、道具を本当に使いこなすことができないばかりでなく、逆に道具に使われて山に行く結果になるのだ。だからそういう人たちは失敗すると、その責任をすぐ道具に押しつけたりする。

一方、これとは反対に、草鞋やクレツテル・シューを使うのが常識となつていゝ倉沢や幽ノ沢の岩場を、鉦靴で登らないとスツキリしない、というさむらいがこのごろになつて、再びぼつぼつと現われてきた。実力もないのに無理をすることは断じていけないが、こうして基礎的技術をみっちり磨こうという風潮が現れたことは、まことに頼もしい限りだ。

網

網は信用できる品を買うばかりでなく、使用中常に検査を怠らないことが大切である。わずかでも傷がついたり、強い力を受けたことのあるものは、いさぎよく捨てるか、確保以外の用途に廻す。網を大切に取扱う精神は決して忘れてはならないが、網は永く愛用されるという性質の道具ではなく、むしろ消耗品と見なされるもので、網の購入代金は綱という財産を買取る金ではなく、傷害保険料でも払うつもりにならないければいけない。

綱はイタリヤ麻が優れているが、マニラ麻も広く用いられ、わが国ではマニラ麻が

岩登り用具の役目は、岩場における登山者の保護と、登攀を容易にさせることとの二つである。登山者の保護とは綱を使つて確保するとか、丈夫な登山靴で足を護るといふようなことで、その必要性についてはいまさら論ずるまでもあるまいが、登山を容易にさせる機能については、じつくりと考へて見る必要がある。

適当な道具を利用して、登山を容易にし、登山者の行動範囲をひろげることそのことは、決して悪いことではあるまい。しかし登山者が道具の性能に頼つて、実力以上の先ほしつた登山を試みることは、技術の低下を招くばかりでなく、必要な中間段階をおろそかにしやすく、ひいては危険も生じやすい。

具体的にいえば、鉦靴で登りこなせないような岩を、練習によつて克服しようとする努力をおこたり、安直なクレツテル・シューにたよつて、ごまかしの技術で登つてしまふ。またルート・ファインディングの能力に欠けるところがあるにもかかわらず、不勉強で、ちよつと面倒な場所に出ると、気やすくハーケンを打ちこんで吊上げたりトラバースしたりする。

便宜主義そのものを排撃せよというのではないが、便宜主義にながされた人が遭難した場合には、ひどいものになるのが普通だ。これから岩登りを始めようという新しい人の場合には、道具のご厄介になつてやつと這いあがるような登攀は見向きもしないで、むしろ道具の不備を技術と練習によ

つて補おうという積極性が望ましく、こうしてこそ、はじめて立派な技術も生れてくるのである。

登山がある一つの段階で終つてしまふならば、それにもつとも適した道具を選んで差支えあるまい。しかし次に進むべき段階が待っているときには、必ずしもそうとはいえない。例えば、三ツ峠の岩場や芦屋のロック・ガーデンで遊んでいる分には、地下足袋がズツクの靴が便利で、使い方がむずかしく高価な鉦靴をわざわざ使う必要は決してないが、大規模な岩と堅雪の北アルプスの岩場にとりつくには、しっかりと鉦靴がほしい。また積雪期ともなれば、地下足袋ではとても歩けないから、できるならばはじめから、足の保護を主眼とした鉦

注ぐのが急務である。

日本の登山界はこれまで、直接確保の危険に対する認識が甘かったようである。岩登り術の教科書の中には、直接確保を奨励した記事や写真さえ見受けられる。そして直接確保に起因すると思われる事故は数多い。ナイロンの欠陥が発見されたのは、やはり直接確保に使った場合で、これによってナイロンの欠陥が端的に現われたものであろう。

ハーケンによる先頭の確保は一種の直接確保である。ハーケンを気やすく打つような今日の風潮も、直接確保の危険を軽視するところからきたのかも知れない。

昔、奇妙な姿勢の間接確保法が用いられたことがある。そして綱と岩との間に指をつめた、というような理由から間接確保が排斥され、また直接確保が便利だということで、間接確保が等閑視されてきたようなことがある。

しかしよく考えて見ると、これは本末顛倒も甚しいもので、直接確保が便利だから採用するというのならば、全く確保をやめてしまった方が一層便利だ、という議論に走りかねない。

筆者はかつて急なスラブにおける二十米ほどの墜落を、間接確保の一種たる単純な肩確保によつて、無事に阻止しえた例を目撃しているが、これに反して直接確保の場合には、僅か数尺の墜落で、まともな綱がぶつたりと切れてしまった例がある。いままでのしきたりにこだわることなく、改めて

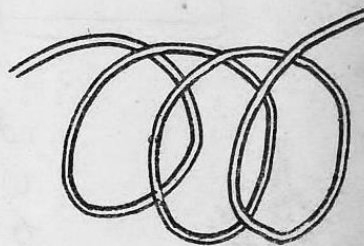
直接確保の危険を直視して頂きたい。連続登攀のときでさえ気をつけなければならぬのだから、隔時登攀を要するほどの場合には、直接確保を使うことは、先頭に対して、失敗したときは君一人だけ死に給え、というようなものだ。そのかわり間接確保を上手に使いこなせば現在使われているような心細い綱そのままでも、激しい墜落を確保しえた例も多い。

綱は使用せずに保存しておいただけでも劣化するといわれるほどだから、しごいたり、水につけたりして使いやすくするというのは論外である。いざというときに切れないということが一番大切で、使いやすいかどうかは第二の問題である。なるべく製造直後の状態を保つべきだろう。もし扱いやすい綱がほしかったら、初めからしなやかな軟い製品を選ぶべきで、そのためにはマニラよりもイタリヤ麻や日本麻の方がいいようだ。綱はなるべく汚さないように濡れたときにはかけばしにする。涼しい乾いた場所に格納する。



Zより

綱のよりの方向は、わが国ではZよりが普通だが、舶来品にはその逆のSよりもある。Zよりの綱はネジの進行方向によられたものであるが、この綱をループにしてしまうときには、ネジと反対方向の逆螺旋ループにするのがよいと思う。これを逆にする、ひどいキンク(まきこぶ)を生じる。

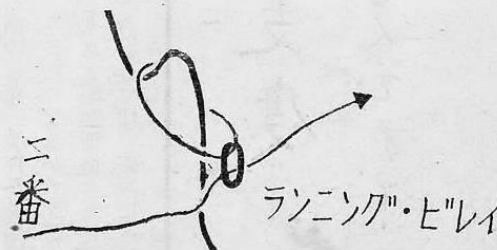


逆螺旋ループ

綱を体に結びつけるには、両端の者はブリーン結びを、中間者はフューラー結び、その他を用いるの

が普通だが、ともにずつこけないように、胴にかたく結ぶ。もしこれがゆるいと墜落のとき肋骨をやられる恐れがある。また厳寒時、着ぶくれたとき、逆さに墜落した場合綱が足の方に抜けてしまう恐れがある。こういうときは肩と胴の両方にかける二重ブリーン結びがいい。筆者がマナスル隊のために設計した確保バンドは、これを一層便利に、確実にしたものである。

綱の着脱にはカラビナを使うと便利になる。右に述べた確保バンドもカラビナを使うものであるが、クライマーは各自五〜七尺くらいの短い綱(スリング)を腹にしつかりと捲き、これにカラビナをかけておく。綱にはその一端または両端にアイス・ブライス(薩摩編み)を作り、シンプルで補強しておく、これをクライマーのカラビナに連結するわけだ。こうすると結び目による綱の強度低下も現われないことになるが、この場合注意すべきは、カラビナの強度で



二番

ランニング・ピレイ

り期待できないので、この方法もこれ自体ではハーケンによる直接確保と大した差はない。しかし綱が、岩角とちがつて滑りやすいカラビナを通るのであるから、制動確保を用いれば間接確保たらしめることができるし、ハーケンのように簡単に抜ける心配は少ない。スリングをかける岩角が鋭いときには、手拭や帽子で保護し、切断を予防する。

懸垂下降のとき、終つてから二重綱がはずれないで困つた経験を持つ人は多いであらう。麻綱がはげたり、わが国ではマニラ



てく"す 結び"

確保者は身近の綱にフューラー結びを作り、これをピンにかけたり、あるいはチョック・ストーンに綱を結びつけたりする。ところがこれは実際にやってみるとバカにならない時間つぶしで、数多いピッチでは面倒にさえ感じる。こういうときにもスリングが応用できる。トップはスリングを周囲五尺五寸くらいの輪に作って、カラビナとともに肩にかけておく。スタンスに着いたならば、スリングをピンにかけて、カラビナで腰の綱に連結する。スリングが長すぎた

ひやした経験者も多いはずだ。こういうとき、始めピンにスリングをかけ、これに綱をかけるようにすると具合よくなる。昔風の捨縄という言葉から、ただ一回で捨ててしまうので、粗末なものでいいという印象を受けた人も多いであろうが、実はスリングは岩角に直接ひっかけるものだから、ラニンゲ・ビレー用にせよ、懸垂用にせよ登山綱以上にしっかりとつくりたい。スリングは岩に直接触れるものだから、ナイロンは禁物である。輪に作るためには、てくす結びがいい。

アンカーをするには、確保者は身近の綱にフューラー結びを作り、これをピンにかけたり、あるいはチョック・ストーンに綱を結びつけたりする。ところがこれは実際にやってみるとバカにならない時間つぶしで、数多いピッチでは面倒にさえ感じる。こういうときにもスリングが応用できる。トップはスリングを周囲五尺五寸くらいの輪に作って、カラビナとともに肩にかけておく。スタンスに着いたならば、スリングをピンにかけて、カラビナで腰の綱に連結する。スリングが長すぎた

三ツ道具

ハークンはカラビナとともに使われるもので、綱以上に強いことが望ましい。しかしハークンの打ちこみ状態はクラックにより千差万別で、どの位の力に耐えるかは、簡単に知ることができない。ハークンを懸垂のピンとしたようなおだやかな使い方でも、しばしば抜けたという例が過去に報告されているくらいだ。まして墜落のショックを受けたとき、抜けないですむかどうかは判断のしようもなく、こういうとき何本も打たれたハークンが片ばしから抜けてしまったという例は、数多く聞かされている。

カラビナはハークンとちがつて、適当に作れば綱よりも確実に強くすることができる。そのための第一条件は、ショックを受けても噛合部が開かないことだから、安全装置つきが望ましい。その次は蝶番部と噛合部の設計が適当なことである。カラビナはハークンを使わない場合にも使い道が多い。確実な品を選んでおきたい。

ところがこれも外観では判断がむずかしいもので、しかもこれを保証する業者もない状態だから、抽出的に破壊試験でもやってみる以外には、その強さを知る方法がないのは残念だ。

以上ハークンやカラビナのような道具は長い歴史の割にはまるで頼りにならないもので、カラビナの場合には、危いと思つたら一ヶ所に同時に二個使うという手もあるが、ハークンの場合には、懸垂のような弱い力で抜けたような例さえある。だからこういう人工補助を利用する場合には、枯木の枝にでも乗るくらいの信頼しか持てないがこれに対しては、制動確保のような緩衝作用の大きい確保法を採用し、ハークンにかかるショックを弱める積極的努力が必要である。

ハークンを打つのはたいいてい足場のよくないところにきまつているから、これを打ちこむハンマーは、扱いやすくて、打撃の強いものがほしい。だからアクロバチック（軽業）の専門家はハンマーの選択にも吟味をこらすようであるが、いざというときの用意に一―二本のハークンを携行する場合には、石ころを拾って打ちこめば間にあうだろう。

(日本山岳会員・横浜市港北区篠原町二二六三)

装備は山男の生命です

20数年の伝統を持つ当麻のピッケル・アイゼン

優秀さを誇る登山靴

登山用具の御用意は

イーグル

神田・神保町一ノ四

神田日活通り6

TEL 295763